

正面参道

道路から住吉大社の本殿へと続く広い道を「正面参道」という。神社や仏閣の表参道を「参道」(文字通り、参拝するための道)と呼び、「ショウメン」とは「正面」のことを意味する。参道を歩くことは参拝者の最初の行為であり、世俗的なものから神聖なものへの移行を意味する。

住吉大社は日本の古典時代（550-1185）の貴族社会と密接な関係があり、当時の文学作品にも多く登場している。紫式部(970? -1019?)の11世紀の古典、「源氏物語」の中で、主人公の光源氏が住吉大社を訪れて、須磨海岸（現在の神戸市）で不名誉な亡命生活をしていた時期に、自分を守ってくれたことを神々に感謝する。紫式部は正面参道のすぐ前の海岸に生える松の美しさを讃え、松の枝の間から白波を見ることができると記している。その光景から住吉大社が海との関係が深かったことがうかがえる。住吉大社はかつて大阪湾の端に位置しており、泥の堆積や埋め立てによって海岸線が西に移動した。